

目次

はしがき	i
序論	1
第1節 本研究の問題意識	1
第2節 環境デザインの先行研究の状況	2
2-1 デザイン・ウィズ・ネイチャーとは	3
2-2 先行研究・マクハーグによる地域生態計画の思想	4
第3節 アフリカ王国文化のコスモロジー研究の状況	5
3-1 コスモロジー（宇宙論）について	5
3-2 王国文化の土着宗教に対する先行事例	6
3-3 住居研究の概要	8
第4節 研究目的と論文構成	9
第1章 環境デザインとエコツーリズム	13
第1節 観光の本質	13
第2節 カメルーンにおける自然と文化の観光価値	15
第3節 王国文化とエコツーリズム	21
3-1 計画の概要	21
3-2 汎神論的自然観と地域生態計画	23
3-3 エコツーリズムと地域生態計画	25
第2章 ティカールの集落とその自然及び文化的背景 ——バメッシング王国を事例に	29
第1節 集落空間の分析手法	29
第2節 カメルーン北西州の自然と文化	30
2-1 自然環境	30
2-2 民族集団	32
3-1 聖なる住居空間	95
3-2 住居空間の構造機能分析	96
3-3 住居空間の環境デザイン原理	103
第4章 王宮の空間構造	109
第1節 王国の社会組織	109
1-1 ティカールの神聖王	109
1-2 ティカールの宗教観	110
1-3 ティカールの社会組織	113
1-4 バフツ王国の社会組織	114
第2節 王宮のコスモロジー	116
2-1 王宮建築	116
2-2 バメッシング王宮の空間構成と機能	118
2-3 コスモロジーを反映した王宮の空間構造	124
2-3-1 バメッシングの事例	125
2-3-2 バフツの事例	125
2-4 バフツのアビンフォ祭り	131
2-4-1 祭りの概要	131
2-4-2 祭りの内容	133
2-5 考察	143
第5章 王国文化の変容	145
第1節 民族芸術の文化変容	145
第2節 文化遺産としての王宮	147
2-1 バフツ王国の地域変容	147
2-1-1 近代国家における神聖王と王制社会	147
2-1-2 バフツ王国の歴史文化	149
2-1-3 文化遺産としてのバフツ王宮	150
2-1-4 観光資源としての民族芸術	151
2-2 バフツ王宮の修復・博物館開設計画	152

第3節 バメッシング王国の自然と文化	34
3-1 自然環境	34
3-2 経済活動	37
第4節 集落空間のコスモロジー	42
4-1 集落形成の云承	42
4-2 聖地の空間構造	44
4-3 方位観	52
4-4 ティカールの匿名信仰にみるエコロジー思想	53
第3章 ティカールの住居	55
第1節 住居様式の分類とその変容	55
1-1 中央アフリカの住居様式	55
1-2 調査地・ティカールの住居	56
1-2-1 バメッシング王国の住居	57
1-2-2 住居の分類	60
1-2-3 住居様式の変容要因	64
1-2-4 住居の利用	68
1-2-5 室内空間	69
1-2-6 生活用具	76
第2節 住居の建築過程	77
2-1 整地	78
2-2 材料	79
2-3 道具	80
2-4 壁 (<i>kusangch</i>)	81
2-5 天井 (<i>kukwingch</i>)	83
2-6 屋根 (<i>butongch</i>)	83
2-7 壁、天井、屋根の祖立て	86
2-8 屋根葺き (<i>mu'engch</i>)	89
2-9 風土建築の意味	92
第3節 住居空間のコスモロジー	95

2-2-1 計画の概要	152
2-2-2 博物館開設計画	153
2-2-3 公開博物館の展示用収集品	155
2-2-4 収蔵館（神聖博物館）の所蔵品	157
第3節 考察	159
結び	161
第1節 環境デザインと民族学研究	161
第2節 ティカールの王国文化における環境デザイン	162
第3節 今後の課題	164
あとがき	167
註	169
参考文献	175
索引	179

バフツの人びとは、「王は秘密結社の息子だ」という言い方をし、新たな王を選び育て上げるのが秘密結社員をはじめとする王国のキングメーカーと呼ばれる人びとの役割であり、逆に王国の人びとは王が体現する創造神の力によって守護されるという相互関係がある。神聖王を支えるために存在する秘密結社の行動原理は土着宗教のコスモロジーに基づく祖霊・精霊崇拝にあり、この世の創造神が究極する目に見えない超自然的な力を受容できる王は神聖社の中心に位置づけられる。

驚くべきことは、アフリカの無文字社会においてこのような複雑な社会組織が成立し、現代においても存続しているという事実である。社会構成の基本単位である家族の幸福を祈ることは人間に共通する願いである。多様な民族文化はその願いを達成するためにさまざまな生活様式を生み出してきた。エルマン・R・サーヴィスは人間社会の発展に「バンド」「部族」「酋长制社会」「未開国家」の4段階を設定した⁴⁸⁾。ティカールの社会組織は、家族や親族のつながりを中心に、顔の見える適正規模での酋长制社会の一例と考えることができる。

カメルーンに残存する多数の自律的な神聖王を戴くティカールなどの酋长制社会は、人びとが信じるコスモロジーに基づき社会の秩序を維持するために考え出された一つの伝統文化なのである。

第2節 王宮のコスモロジー

2-1 王宮建築

王宮の建築様式は、前述した伝統的住居様式を基本型として形成されてきたようである。

ティカールの住居様式は間取り、構造、意匠のいずれにおいても歴史の変遷を遂げつつあり、現地調査では様々な様式のものが見られる。王宮建築に関しても例外ではなく、過去に火災で焼失したバメッシング王国の王宮内の建築物は現在ではほとんどが日干し煉瓦壁とトタン屋根である（写真46）。筆者が調査した他の王宮の建築様式も材料的には多様性が見られる。バメッシング王国から西北西へ約40km離れたバフツ王国の王宮建築は工の祖霊殿を除いて20世紀はじめ



写真46 バメッシング王宮内の祖霊殿はトタン屋根と日干し煉瓦壁からなる
(1989年・筆者撮影)



写真47 バフツ王宮内のほとんどの建物はドイツ植民地時代に再建されたもの
(1994年・筆者撮影)

にドイツ人建築家の指導により再建されたものである（写真47）。バフツから南へ約70kmのところの位置するバンジュン（Bancjoun）にあるバミレケの王国の王宮は伝統的様式をかなり留めているが、王自身の居住する家屋は鉄筋コンクリート造りである。また、バフツから東南へ約60kmのバムンの王都・ファンバンにある王宮の主要建築物もドイツ人が建築したものである。

一方、現でも神聖王を中心とする伝統的な三制社会が存続しているため、全ての調査した王宮空間の構成と機能の面に関して、ほぼ共通する伝統的様式を読み取ることが可能である。前章において述べたティカールの伝統的住居様式がこの王宮建築の基本型となり、政治、行政、儀礼を行う公共空間が付け加わることで、一般民家よりは一層複雑化・大規模化した現在の王宮の様式が形成されたと推測できる。従って、王宮建築の様式と王制社会組織は表裏一体の関係にあり、王宮建築の空間的意味を知ることはその社会的・文化的背景としての伝統的土着社会を理解する一つの方途ともなる。

世襲の王をもつティカールにおいて、かつては移住や王の世代交代によって王宮の場所が移動されてきたが、現在でもこれを挙げる王國も稀ではない。

2-2 バメッシング王宮の空間構成と機能（図14）

王宮空間とその他の住居空間とを比較して見ると、その様式や特質に主要な相違点が二つある。まず、屋敷が大規模になり、装飾性の高い、数多くの家屋が建っていることである。次に、家屋や塀で囲まれた多くの閉鎖的な中庭が構成され、隔離性の高い空間が存在している点である。このような特質は長老階級の住居にもみられるが、王国で最も高位である王には様々なタブーが存在する。例えば食事をしているところを住民に見られたり、住民が直接、王の身体に触れることを禁じられているため、王は「世俗的な人びとが自由に立ち入ることのできない居住空間」に生活しなければならない。また王宮には、歴代の王の祖霊や大地の精霊を祭る神聖な場所や、さらに聖なる手さげバッグ⁴⁹⁾が保管された家屋があり、これらの場所へ立ち入ることができる者は限られている。王宮には王の日常生活の場だけでなく、このような王制社会の秩序化に役立っている聖なる祭祀のための空間が存在するのである（写真48）。

王宮の北の部分には森を背にして2棟のグンバ（*ngunba*）と呼ばれる秘密結



社の家屋の建っている空間がある（写真49）。これらの家屋は精霊、祖霊、神霊などの超自然的な霊的存在を象徴する仮面や、太鼓をはじめとする様々な祭具を保管し、成人男子である構成員の会合のために利用される。しかし、構成員でない男子、特に女性と王家の男性がここへ入ることはタブーとされる。グンバは呪術的・宗教的な意味合いが強いが、昔は軍事組織としても重要であったと考えられるグンバの構成員は王族を除いた王国の男性であり、毎年祭りの前になると王国の各地区の代表者により、広場とグンバの間を仕切っている塀の作り替えが行われる（写真50）。その塀はスピアグラス（*jasoh*, *Arundo donax*）の茎を組み合わせて作られている。グンバの有カメンバーである長老・貴族階級の男性達は、王国内においてより強い呪術、宗教、政治の力を備えている。一方王家の祖霊や王国の精霊を祭り、王と共に政治的な会合をもつ秘密結社の空間は、王宮において最も奥まった所に位置する。これらの空間の周りには、祭りの行われる広場、歴代の王の墓地、主と長老達の会合の場所がある。神聖王を中心とする祭